

聖書：マルコの福音書 9：30～37

説教題：だれが一番偉いか

日時：2025 年 12 月 28 日（朝拝）

イエス様は今日の箇所では 2 回目となる受難予告をされます。30 節に「人に知られたくないと思われた」とあるのは、この大切な主題について弟子たちにしっかり教えたいと願われたからでしょう。その内容が 31 節にあります。「人の子は人々の手に引き渡され、殺される。しかし、殺されて三日後によみがえる」。これは 8 章 31 節に記された 1 回目の受難予告の内容と基本的には同じです。イエス様はこれから苦しみを受け、人々に殺され、三日後に復活するという内容です。しかし細かく見ると新しい要素も加えられています。それは特に「人々の手に引き渡され」という部分です。誰によってイエス様は引き渡されるのでしょうか。この後、この福音書を読み進めると、イエス様はユダによって祭司長たちに引き渡されること（14 章 11 節）、ユダヤの最高法院によってピラトに引き渡されること（15 章 1 節）、またピラトによって兵士たちに引き渡されること（15 章 15 節）が記されます。しかし多くの注解者たちはここにもう一つの可能性を見ます。それは「神によって引き渡される」という理解です。実際このことと同じ言葉が、神がイエス様を引き渡したことを語る御言葉において使われています。ローマ人への手紙 8 章 32 節：「私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるのでしょうか。」そして今日の箇所の「人々の手に引き渡され」という言葉は、引き渡される先が人間であることを示しています。とすると引き渡した方として考えられているのは「神」ではないかという理解がより浮かび上がって来るわけです。そうだとすると、イエス様はこの 2 回目の受難予告において、単にご自分にこれから臨むであろう災いを予告されただけではないことになります。むしろイエス様は神のご計画について語られたことになると思います。神の御心によってイエス様は人々の手に引き渡されるのです。そして人々はイエス様を殺します。もちろん神が引き渡したからと言って人間の責任が軽くなるわけではありません。人間は自らの悪い心によってイエス様を殺します。しかしその人間の悪を越えて神の御心が成し遂げられます。その神の御心を見つめながら、この道を進んで行こうとされるイエス様のお姿がここにあるわけです。そしてイエス様はその先に復活があることもしっかり見据えておられました。結果がどうなるか分からないまま、とにかく十字架へ進まれたのではないのです。ヘブル人への手紙 12 章 2 節：「信仰の創始者であり完成者

であるイエスから、目を離さないでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせず十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。」イエス様は十字架上のみわざの先に復活があり、その復活を通して救いが神の定めた人々にもたらされるという大きな喜びがあることを見つめておられました。それゆえに十字架の辱めをものともせずに進まれたのです。まさにそのイエス様のお姿が今日の箇所にもあります。イエス様はそのことを弟子たちに証しされたのです。

しかし 32 節に「弟子たちにはこのことばが理解できなかった」とあります。彼らとしてはなぜメシアが人々の手に引き渡され、殺されなければならないのか、全く理解できませんでした。救い主が苦しみ、死ぬということは、彼らの頭の中では矛盾する考えでした。また彼らはイエス様に尋ねるのを恐れていました。これまでも「まだ悟らないのですか」と繰り返しイエス様に叱責された彼らです。また同じように叱られるのではないかという思いがあったのかもしれませんが。あるいはそれ以上に、このような話は聞きたくない、これ以上詳しく知りたくないという思いだったのかもしれませんが。

しかし、弟子たちの無理解は続く出来事によって一層明らかにされます。1 回目の受難予告の時もそうでした。イエス様が初めて受難について語り始めた直後、ペテロがイエス様を脇にお連れしていさめました。「そんなことを言うものではありません！」と。その結果、イエス様から「下がれ、サタン！」と言われてしまいました。あなたは神のことを思わず、人のことを思っている！と。ここでも同じです。イエス様が受難予告をされた後、弟子たちはどうしていたのでしょうか。彼らは「だれが一番偉いか」と論じ合っていたというのです。全くちぐはぐな内容です。彼らがイエス様の言葉を全然理解していなかったことが、こうして再び露呈されたのです。

イエス様は道を歩きながら弟子たちが後ろでそのような話をしていたのを聞いておられたのでしょうか。そこで家に入ってから彼らに、こう尋ねられました。「来る途中、何を論じ合っていたのですか。」すると弟子たちは黙り込んでしまいました。自分たちの話がイエス様の心にかなうものではない、そのことくらいは分かったのでしょうか。そこで恥じ入り、誰も何も言いませんでした。そんな彼らに対してイエス様は腰を下ろして話し始められました。これは当時の教師が大切な話をする時の姿勢だったようです。イエス様は言われました。「だれでも先頭に立ちたいと思う者は、皆の後

になり、皆に仕える者になりなさい。」 弟子たちはみな自分が先頭に立ちたいと思っていました。もうすぐ新しい時代が始まるのではないか。神の国が打ち建てられるのではないか。その時、自分たちはどんな地位に就けるのか。できるなら他の人より上にいたい。偉い立場に就き、支配する側に回りたい。そうした思いから「誰が一番偉いか」と論じ合っていたのです。お互いの評価を聞きながら、今の内に自分のポジションを確かなものにしておきたいと願ったのでしょう。そんな彼らにイエス様は「皆の後になりなさい。先頭ではなく、一番最後になりなさい」と言われました。第三版までここは「皆のしんがりとなりなさい」と訳されていました。つまり真逆の一番下に行きなさいということです。そしてそこで「皆に仕える者になりなさい。」 上に立って人を支配し、人に仕えさせようとするのではなく、あなたがみんなに仕えることを目指しなさい！と。イエス様はここに神の国の基準をはっきりと示されました。これはこの世の考え方と全く反対です。この世はどうすれば人より上に立てるかを考え、競い合います。ですから「誰が偉いか」と論じ合うことが好きです。しかし神の国ではその心の向きが逆です。先頭に立ちたいと思う者は一番後ろに着く者であれということです。そしてそこでみんなに仕える者であれと。これは一時的に低い姿勢を取れば、いずれ高く上げてもらえるという話ではありません。しばらく我慢して謙遜を演じなさいということではありません。イエス様が言っておられるのは、これが神の国に生きる者が目指すべき生き方であるということです。人に仕えさせることを喜ぶのではなく、人に仕えることを喜びとするのが神の国の生き方であると。

そしてイエス様はこの原則をより深く弟子たちに教えるため、一人の子どもの手を取って、彼らの真ん中に立たせ、その子を腕に抱いて語り始められました。聖書には確かに「子どものように神の国を受け入れる者でなければ、云々」とあるように、子どもから学ぶようにと言われている言葉もあります。しかしここはそうではありません。今日の私たちは「子ども」と聞くと、無垢で、無邪気で、純粋で、といったロマンティックなイメージを思い浮かべるかもしれません。しかし当時の社会ではそうではありませんでした。ここでも子どもは取るに足らない存在の代表として引き出されています。子どもは社会的な地位も権力もなく、いわば無視できる存在です。弟子たちは先ほど「だれが一番偉いか」と論じ合っていましたが、その候補者に子どもは上がって来ません。重要とは見なされていない者たちです。そのような子どもの一人をイエス様はご自分のもとに引き寄せ、こう言われました。「だれでも、このような子どもたちの一人を、わたしの名のゆえに受け入れる人は、わたしを受け入れるのです。」 つ

まりイエス様が言うておられることは、イエス様はこのような社会が軽んじている者、誰も重要とは思っていない者たちとご自分を結び付けておられるということです。イエス様はそのような者たちを大切にし、彼らとともにおられます。だからそのことを思い、そのような人々を大切にする人はイエス様ご自身を受け入れ、大切にしているのだと言われたのです。思い起こされるのはマタイの福音書 25 章 40 節でイエス様が言われた次の言葉です。「まことに、あなたがたに言います。あなたがたが、これらのわたしの兄弟たち、それも最も小さい者たちの一人にしたことは、わたしにしたのです。」 イエス様ご自身がそのような小さき者たちとご自分を結び付けておられます。ですから私たちがそのような人々を大切にし、仕えるなら、それはイエス様に対してそうしていることになると思います。イエス様は言われたのです。実に神の国で最も偉い方は社会で無視され、見下されている人、何の重要性もないと思われ、顧みられていない人々のところにおられます。イエスさまはまさに「しんがり」におられる方であり、仕える方としてそこにおられる方です。さらにイエス様は、そのようにする人はイエス様を遣わされた方、すなわち父なる神を受け入れる人だとも続けて言われました。つまり父なる神もそこにおられるということです。確かに父なる神はイエス様をこの世に遣わし、十字架の死へと引き渡された方だということを先に見ました。父なる神は救いようのない、最も低き者たちに目を留め、仕えることにご自身をささげておられる方です。そのような方として父なる神も最も小さき者たちとともにおられます。イエス様も、父なる神も、そこにこそおられ、そこで仕えておられるのです。

この神の国の基準に照らして私たちはどうでしょうか。私たちが日々目を向け、追い求めている方向とどれほど違うかを思われるのではないのでしょうか。ある人は「その人が普段どんな人と関わって生きているかを見れば、その人の志向性、心の向きが分かる」と言いました。もし私たちが社会的地位のある人や学歴のある人、事業が成功している人、裕福な人、あるいは美しい人、またこの世からほめそやされている人との関わりばかりを求めて歩んでいるなら、どうでしょう。私たちがそうするのは、そうした人々との関わりを通して自分もその人たちのように高くなれるかもしれない。自分の立場や価値を向上させ、立派で偉い人たちの仲間入りができるかもしれないと願うからではないのでしょうか。そのようにして、この世で重んじられている人々とのみ関わり、そうではない人々のことは視野にも入れず、ほとんど関わらない生き方をしているとするとどうでしょう。その人は父なる神やイエス様とは全く反対の生き方をしていることになります。神の国の基準で価値ある生き方をしていない

ことになります。この世では人々から「高い」「偉い」と思われる世界に生きたとしても、やがて神の国が完成した時には神と全く反対の生き方をした人として、その高い位置から引きずり降ろされ、追い散らされることになる。先週見た「マリアの賛歌」における終末的大逆転そのものです。

そうならないために私たちはどうしたら良いでしょうか。その答えは今日の箇所ではイエス様が引き寄せられた子どもとはまさに自分のことだと知ることによってです。私たちは神の前で小さく、貧しく、取るに足らない者たちです。何かを主張することもできず、むしろ御前に罪ある者であり、自分で自分を救うことができない、無力でどうしようもないあわれな者です。しかしイエス様はそんな最も低きに沈んでいた私たちを救うために、父なる神から遣わされ、人となってこの世に来てくださいました。そして私たちの身代わりを果たすため、この後いよいよ受難を深める道へと進んで行かれます。人々の手に引き渡され、いのちさえもささげる歩みをしてくださいます。そのようにして最も小さい者たちである私たちのために仕えてくださいました。この神がしてくださったことを心から感謝し、受け入れるなら、私たちもイエス様がしてくださったように、そのように生きる者になりたいと願わされるのではないのでしょうか。私たちの生活においてイエス様を映し出す者であるように、そしてそのことを通してイエス様と父なる神への感謝を表して行く者であるようにと導かれるのではないのでしょうか。

この生き方へ進むことは私たちを真の自由へと解放してくれるものでもあります。私たちは「誰が一番偉いか」と論じ合って、互いに競い合い、高い地位を得るために争わなくて良いのです。もっと高いところに上らなければ自分の幸せはないと考えて、ステータスを巡って駆け引きをし、時には汚い手を使ってでも上に行こうと必死にならなくて良いのです。そのような生き方は神の国の基準と相容れないものであり、やがて全部がひっくり返されます。永続するものではありません。むしろイエス様が示された真に意味のある生き方は、「皆の後になり、皆に仕える者になりなさい」という生き方です。これは私たち皆にできることです。自分に与えられている役割、働き、立場、賜物を用いて仕える歩みに進めば良いのです。自分が置かれている場所で、神の召しを受け止めて、与えられているすべてのことを用いて神の御心にかなう仕方で皆に仕える歩みを求めて行けば良いのです。そして特に弱い人、助けを必要としている人、周りから顧みられていない人々に心を向け、その人々に仕える歩みを目指して

行けば良いのです。そのように生きることは私たちが置かれている場所で神の国を広げて行く働きに参与することであり、それは永遠に価値が残る働きです。そしてそれはやがて神の御前で真の賞賛へと至るものです。私たちにはこの歩みへと進むための動機が与えられています。それは何よりもイエス様がまず私たちにそうしてくださったということです。イエス様はいのちまでもささげて私たちに仕え、救いを与えてくださいました。そのことへの感謝から、私たちもイエス様に倣う歩みへと進むことができます。そしてその時、私たちは「そのようにする人は、わたしを受け入れるのです」と言われるイエス様との深い交わりに生かされる者となります。そればかりでなく、イエス様を遣わされた父なる神との豊かな交わりに生かされる者ともなります。こうして私たちは「真の偉大さ」にあずかる者とされるという特権に生かされる者となります。この真の祝福の道を歩む者たちへと導かれて行きたいのです。